



渡辺信明展

その向こう。

渡辺信明展 その向こう。 WATANABE NOBUAKI Solo exhibition at Gallery HAKU

渡辺信明×吉澤敬子 ギャラリー白*1

Interview 2024年12月で閉廊するギャラリー白での最後の個展を前に白と共にした時代とその変化について——聞き手 谷本天志

谷本：お二人のそもそのギャラリー白との出会いから伺います。

吉澤：私はもう最初から。オーナーの鳥山*2 と共にギャラリー白の出資者だった 4 人のうちの 1 人と親戚の間柄だったので、大学生のアルバイトとして内装工事中の夏休みから、ちょこちょこ手伝いに行って、10 月にオープンしてそのまま週 4 日ぐらい。それまで芸術とは縁のない生活だったけど、週替わりでどんどん新しい作家達と接することになりました。歴代スタッフは芸大出身の人達が多かったから随分助けてもらいました。作家さん達もみんな優しく、近所の画廊のオーナーさんもスタッフさんもみんな可愛がってくださいました。

渡辺：最初はまだ学生の時ですね。大学院に入学したての頃、1987 年「宗達の正直者」という四人のグループ展でした。大きな作品をギャラリーで展示した経験としてはそこがスタートで、まだ右も左もわからない状態でした。外で発表するのはどういうことかって、その時の大学の先輩達を見ながら学んでいく時期で、若い作家が実験的に活動している姿に憧れました。美術展だけれど芸祭のような、妙な面白いノリが毎週のようにギャラリーで展開されていて、作品として、美術として、世界と繋がっていく感じがとにかく面白かった。その状況や影響を少なからず受け、「我々もやっていたかなあかん」って先輩に誘われたのが「宗達の正直者」展。ギャラリー白は空間としてすごい魅力を感じていて*3、いくつか個展で自分の作品を並べたいなって思っていました。

谷本：90 年に個展をされてからはほぼ隔年で個展をされて、その間にグループ展にも参加されるようになってますね。

渡辺：当時は年一回の個展を自分に課していこうっていうのがあって、作品の見せ方とかを模索しながら、大阪と京都で交互に発表の場所を作っていこうと必死でした。その後ギャラリー白さんをはじめ、いろいろな画廊さんに長年にわたってたくさん発表の機会を与えていただいて、みなさんにずいぶん育てていただきました。

吉澤：鳥山は個展をやるだけじゃなくて、グループ展にも参加して、出来るだけ発表した方がいいよってみんなに言ってたんですよ。企画も画廊がするんですけど、自分達でも企画したらいいんじゃないかって。渡辺さんにも個展とは別にずっと「ペインタリネス」(1995~2024 年)に参加してもらって、いろいろな変化を見せてもらいました。

渡辺：グループ展は個展とは違って、いわゆるチャレンジの場みたいな、ここではちょっと突拍子もないことをやっても許される(と、当時はそう思っていた)、そういう機会を与えてもらったのはありがたかったですね。

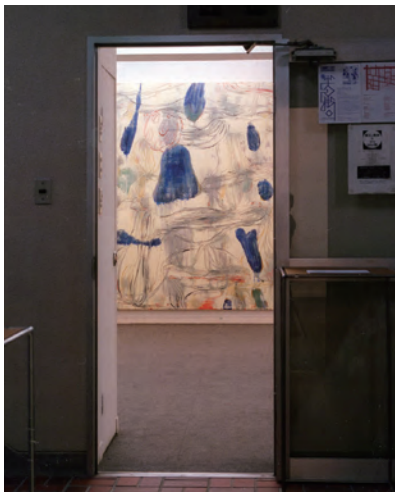
谷本：ギャラリー白はグループ展で若手作家を育成していたというか、鍛えていたイメージはありますね。

吉澤：そうそう、鳥山は若い作家達を大事にしていたからね。だから夏は若い人に借りてもらうために安くしたりとか考えたりしてた。私の代になってからマイナーチェンジで細かくは変わってきてるけどなるべくみんなが思うギャラリー白のイメージは守りたいなとは思ってきました。

*1 ギャラリー白 (ぎゃらりーはく)
1979 年 10 月有限会社ギャラリー白を代表取締役・鳥山健が千福ビル 2 会場で開廊。2002 年 2 月閉廊。同年 9 月現在の星光ビル 2 階にてギャラリー白再開。2003 年 9 月 3 階にギャラリー白 3 を開廊。2013 年 5 月オーナー鳥山健が亡くなり、吉澤敬子が後継者となる。2017 年 1 月 1 階にギャラリー白 kuro、ギャラリー白 shop を開設 2024 年 12 月 21 日閉廊予定。

*2 鳥山 健 (とりやま たけし)
ギャラリー白・初代オーナー。今橋画廊 (大阪市中央区) を経て、1979 年 10 月 3 日大阪市北区西天満にギャラリー白を開廊。絵画、彫刻、陶芸、版画、デザイン、書、写真など多様なジャンル、あらゆる世代の現代美術作品を扱い、「ペインタリネス」「Ceramic Site」などユニークな企画展を多数開催。展覧会のカタログ制作、ギャラリートークなどにも力を入れた。2013 年 5 月 5 日没。

*3 2002 年に現在の場所に移転する前の白は、通路を挟んで大きな展示室が二つあった。



ギャラリー白
〒530-0047
大阪市北区西天満 4-3-3
星光ビル 2F
Tel&Fax: 06-6363-0493
E-mail: art@galleryhaku.com
Web: http://galleryhaku.com/



ギャラリー白
website QR

- JR大阪駅/梅田駅 ▶ 15 分
- 京阪/地下鉄淀屋橋駅①出口 ▶ 10 分
- 地下鉄南森町駅②出口 ▶ 10 分
- 京阪なにわ橋駅①出口 ▶ 5 分

2024
10/28
(月)
11/9
(土)
開廊時間…午前 11 時—午後 7 時
※休廊日…11 月 3 日①・11 月 2 日と 9 日
〔最終日の土曜日はいずれも午後 5 時まで〕

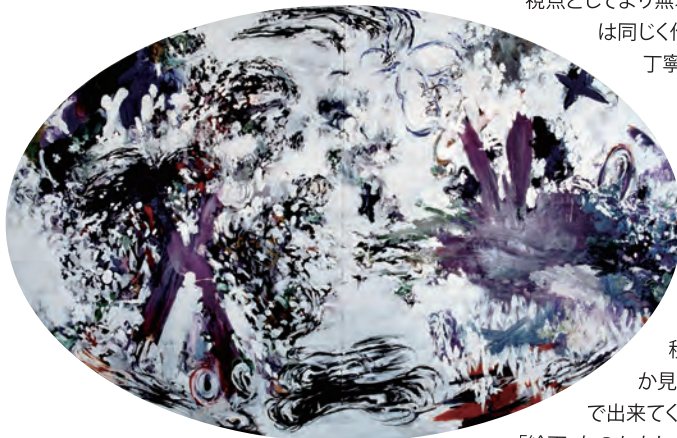
WATANABE NOBUAKI
Solo exhibition at Gallery HAKU



吉澤 敬子（よしざわ けいこ）
1957年奈良生まれ 追手門学院大学文学部心理学科卒業
ギャラリー白開廊時から、学生アルバイトとして勤務 2002年 2 月ギャラリー白閉廊、同年 9 月現在の星光ビルにて再開。2013年 5 月ギャラリー白オーナーが亡くなり後継者となる。2016年 5 月有限会社星光ビルオーナーとなる 2017 年 1 月ギャラリーを3会場に増やし、ギャラリー白 shop を開設



渡辺信明展 ギャラリー白 1990 年



身辺からのぐるり
キャンバスに油彩
235×365 cm
1990

谷本：吉澤さんは渡辺さんをデビュー以来、ずっと見続けられてるということになるんですが、個人的な作家・渡辺信明評は？

吉澤：ブレなくやってる作家ですね。最初に出会った頃から今までブレてないって言うのはすごいことだと思うんですよ、別に同じコトやってるって意味じゃなくて、考え方。最初の楕円の作品の時からキャンパスの向こうとこちら側みたいな世界を描いてらっしゃって、場だけじゃなくて時間の向こう側、こちら側みたいなものもテーマにされていたと思うんですけど、今もそういうものを感じる。画面は変わってきてるけど、根底にあるもの、根本の絵を描くことに対しては向こう側とこちら側、時間、現在、過去とか、そういうことをずっと描き続けておられるのかなと思ってます。

渡辺：僕は最初の頃は木炭とか油性マーカーとかを使って、画面に余白のあるものをつくったりしていたんですよ。そのほかにもアクリルだったり、自作のクレパスを使ったり、ちょっと油彩から外すみたいなことを一生懸命やっていました。大学院の修了作品で楕円型のキャンパスを用いた頃から、油彩でしっかり描くようになったんです。卒業後 4、5 年がその変形キャンパスの時代で、白での初個展もちょうどその頃と重なります。画材も技法もつぎつぎと試行を繰り返す中で、これ同じ人の作品？っていうぐらいの変化があったんです。でも、当時の僕は絵画的であるべきとかあまり意識していなくて、どちらかといえば「絵というものをつくってる」という感覚が強かった。絵画論をちゃんと勉強してその上乘っかってるかっていうと、その頃はぜんぜんそうじゃなくて、もっと手びねり感というか、モノをつくってるっていうニュアンスの方に近かったかなと思うんです。今でも描くっていう行為と同時に、絵をつくっているという感覚が根底にはあって、そういう意味ではあんまり変わってないのかもしれないね。

谷本：僕も個人的にずっと渡辺さんの作品を見てきて、世代的には近いけど、80 年代の作家達の「私」的な表現とは少しズレていて、個人の視点としてより無理のない自然なものを感じていました。それは同じく作家でもありパートナーでもある智子さんとの丁寧な生活の影響かなとも思うんですが。

渡辺：僕らは卒業してわりと早いうちに一緒に生活しだして、時間だけではなく見ているものなんかかなり共有しているから、自然とモノの見方とか、考え方、制作とかにも自分たちの暮らしが影響していると思います。さっき「絵をつくる」という話もしたけど、それは知識を積み重ねた先にあるものではなくて、体験とか見聞きしたものが自然につながったタイミングで出来てくるっていうのが僕にとっての「モノづくり」＝「絵画」なのかもしれない。また僕の場合は、暮らしが主軸にあって、その衣食住の中の様々な「つくる」という面白さを常に感じていました。若い頃は美術や作品をつくるっていう厳しさみたいなことと、こうした暮らしの中のものづくりとは分けて考えていたけれど、それが少し

ずつ同じ線上にあるっていう風になってきて、僕は学生にどうやって作家続けられるんですか？って聞かれた時に、続けるためにやってきたわけじゃなくて、その生活と暮らしの延長上にあったって話をするんですよ。

谷本：2000 年代からかな？個展にタイトルが付くようになるじゃないですか？それはどうい変化があったんですか？

渡辺：それまでは、作品を準備して、搬入の段取りやら、展示やら、、、もう個展をするということで精一杯で。作品には一点ずつタイトルを考えなきゃいけないし（笑）。でもある時、展覧会をもっとトータルにつくっていくという意味では、展覧会にタイトルをつけてあげることも必要じゃないかな、とあらためて思うようになって。そうして始めると、もうただの個展には戻れなくて、、、

吉澤：こっちの白にきてからタイトルがつき出してるね。でもわかりやすくなったんじゃない？観にこられる人にとってはいろんな意味で。

渡辺：もともと僕は文章とかが得意ではなかったし、書く場面はいろいろあっても、責任を持って書くっていうことから、どこかそれまでは逃げていたんだと思う。展覧会場にステートメントがあると、それは作品の説明でもなく、読めば安心して、ちょっと心を開いて観てもらえるようなヒントのような役割をするんじゃないかと思って。だから近年は特に、言葉を丁寧に紡ぐように展覧会のステートメントはわりと時間をかけてつくっています。そして今では大学院のゼミで「日常の中の美術批評」というテーマでエッセイを書かせたりしているんです。思い出してみれば、若い頃に鳥山さんに文章を書きなさいって言われてたことが生きてるのかな。

吉澤：鳥山は文章も自分で書いたらいいじゃないかって、若い人たちに書かせていました。書かせて添削して、書き直させたりしてた。学芸員さんにも書いてもらっていたんですが、作家も書きなさいって言ってました。当時は時代的に黙って観てくださいって空気だった 80 年代なのに。でも鳥山は書けって言ってた。言葉とか文章の強さを信じてたんじゃないかな。作品だけでなくプラス言語がいるって思っていたと思います。

谷本：今回は智子さんと同じ週の個展とのことなんですが、意外に初めてのことなんですね。

吉澤：信明さんがやっているから智子さんもって意識したことはなくて、それぞれ別の作家として考えています。最後ということで同じ週にお願いして、開催していただけることになって、嬉しいなと思ってます。いい意味で呼び合う空間になると思うんですよ。上と下で、なんか見た人の気持ち的にはすごく一体感があって、気持ちよく見れると思うんですね。複数の展示室のある白の良さも楽しめると思います。みんなに見てほしいです。



渡辺信明展 ギャラリー白 2001 年

撮影：森宮英文



ヒカリの頁
キャンバスに油彩
91×91 cm
2024